

## 戦友録⑪ 交友録

### 真摯なキリスト者教育者、反戦運動家

—元「女子学院」院長、大島孝一さん—

吉川 勇一

爆弾」の情報を知ります。そしてその年の暮れ、九州を訪ねる途中、焼野が原の広島を見て衝撃

を受けます。大島さんの一生の反核の意識はここから始まります。

■戦後、東北大学、岩手大学などで教職にいたあと、66年にミッシヨンスクールの女子学院の院長になり、以後14年間、それを続けられます。女子学院の院長は、この学校の卒業生が関係深い女性のみだったのですが、大島さんは初めて外部から就任したことになります。66年からといえば、ベトナム戦争、環境問題、あるいは全共闘問題など、狂瀾怒涛の時期を含む時期です。この学校でも69年11月には、高校2年生が机や椅子を積み上げ、いわゆるバリケード封鎖が始まります。大島

さんは生徒たちの要求を入れて授業を中止し、高校生・教師の全校討論集会を行ない、生徒の提起した問題を真摯に語り合います。授業は3日後に再開されます。生徒の処分などは出されませんでした。

■大島さんはさまざまな学校制度の改革を行ないます。例えば、72年にはそれまであった制服の服装規定を廃止します。「服装は個性をもって自分で選び取るものであり、機能に応じた使い方を工夫すべきであって、……

故大島孝一さん



■本会の会員であり、東京の「女子学院」の元院長で、わだつみ会など各反戦運動、あるいは靖国問題・天皇制問題などで活躍されていたクリスチャンの大島孝一さんは、8月27日に95歳で亡くなりました（左は2002年9月の写真です）。大島さんの訃報は、『東京新聞』や共同通信配信のあるローカル紙などにはかなり出ていたのですが、なぜか全国紙に出なかつたため、大島さんをよくご存知な方でも、逝去を知らなかつた方がかなりいらっしゃいました。葬儀は8月30日、日基教団西千葉教会で行なわれました。

■大島さんは、1919年熊本市生まれ。東北大物理学科を卒業し、福岡管区気象台に勤務の後、41年に応召し、45年の8月6日、市ヶ谷台の陸軍総司令部で「新型

そのことがひとつの教育であると考えます」。各生徒のいわゆる保護者あてに大島さんが配布した文書にはそう載っています。ただ、この通達は一方面的な院長からの通達だったので、一部の中学生からは「強制された自由化反対」というプラカードを掲げて院長室に押しかけられるという、皮肉な波紋もあつたようです。しかし、大島さんの姿勢は、生徒をはじめ、多くの人びとから敬愛の念を抱かれました。

■大島さんの活動は、学園の内部に限られず、日本キリスト教団内で戦争協力への反省・方向転換への努力、靖国問題・天皇制問題などでのキリスト教界内での思想的リード、市民運動の統一行動にも積極的に参加され、戸村一作さん亡きあと、つい最近まで三里塚教会に所属して説教をされていたそうです。

■ベトナム戦争については、65年、「ベトナムに平和を求めるキリスト教の緊急会議」（通称「ベト緊」）を発足、ベ平連よりも早く自立的な反戦市民活動が続けられました。また、前田俊彦さんや私らが「内ゲバ」抗議・阻止のアピールをはじめたときも積極的に参加されました。

■ただ、ひたすら真摯な姿勢の大島さんには、いわゆる裏側のエピソードなど、私は持つていないのです。

■著書には、1982年刊の『自己確認の旅』（新教出版社）、1985年刊の『戦争のなかの青年』（岩波書店）など。

（よしかわ・ゆういち／本会共同代表）